

袋井市三沢古墳群

— 昌栄造建土石採集事業に伴う三沢2号墳緊急調査報告書 —

1 9 9 1

静岡県袋井市教育委員会

例 言

1. 本書は昌栄造建代表取締役 高橋孝（静岡県袋井市鷺巣860-1）を委託者とし、袋井市長 豊田舜次（静岡県袋井市新屋一丁目1番地の1）を受託者として行った三沢古墳群（三沢2号墳）発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は袋井市教育委員会社会教育課の森井雅彦を調査担当者とし、平成2年7月2日から平成2年9月30日まで実施した。
3. 本書の執筆および編集は森井が行った。
4. 発掘調査資料はすべて袋井市教育委員会が保管している。
5. 発掘調査および本書の発刊に係わる事務は袋井市教育委員会社会教育課文化振興係が担当した。

6. 調査体制

発掘調査計画機関 昌栄造建

発掘調査実施機関 袋井市教育委員会

教 育 長 浅 井 通 男

社会教育課長 岩 崎 保

文化振興係長 小 粥 保 夫

主 査 吉 岡 伸 夫

主 任 主 事 建 部 千代子

主任学芸員 永 井 義 博

加 藤 理 文

学 芸 員 松 井 一 明

白 澤 崇

森 井 雅 彦（調査担当者）

7. 発掘調査および、本書作成にあたって、下記の諸氏と機関より御教示、御協力を賜った。
記して感謝する次第である。

杉山勇、村松新作、宇刈自治会、山梨三育会 （敬称略）

8. 発掘調査・整理作業の参加者は次の通りである。

発掘調査

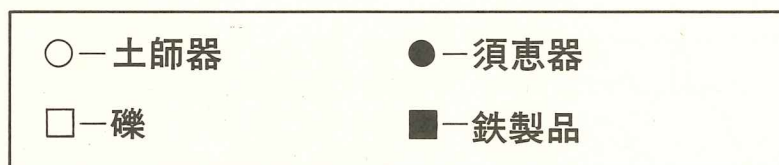
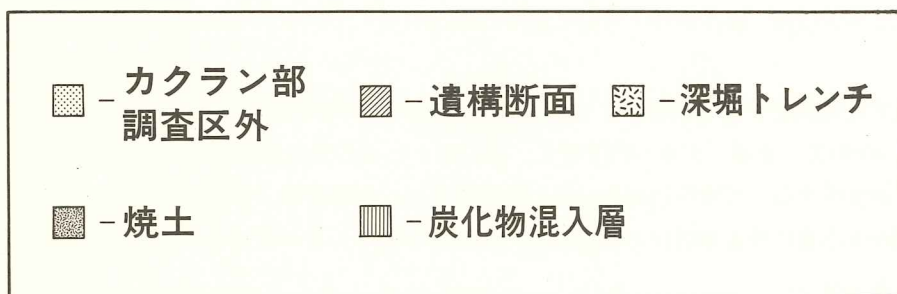
柴田安夫、鈴木儀太郎、竹下政一、戸倉明、中山英一、石黒伊玖美、小山ゆき子、
杉山好枝、鈴木さだ、鈴木辰子、土屋みえ子、寺田フサ子、西尾こう、野元たき、
原田春江、松永みの、森下和子

整理作業

内野則子

凡 例

1. 挿図中の「53.5m」といった数値は標高を表す。
2. 土坑については「坑」の字に統一し墓墳とわかるものについては「墳」の字を用いた。
3. 挿図中で「S」は礫、「P」は土器、「C」は炭化物を示す。記号、スクリントーンについては下記の通りである。



目 次

例 言
凡 例
目 次

I	はじめに	2
II	遺構と遺物	4
III	ま と め	18

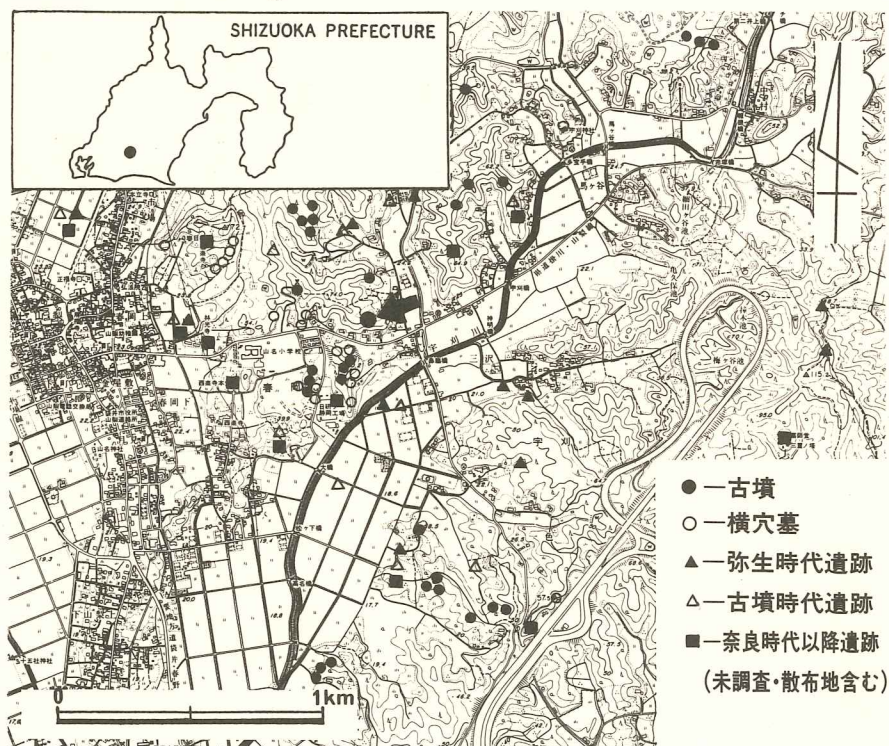
写真図版

I は じ め に

遺跡の位置・環境

袋井市宇刈字西ノ谷625他に所在する三沢古墳群（静岡県遺跡地図Ⅱには今回の調査地は三沢2号墳となっている）は、赤石山系に源を発し南流する太田川と原野谷川の支流、宇刈川に挟まれるようにして南に突出する丘陵の東縁部に位置しており、調査地区南側の宇刈川兩岸は細かく開析されて尾根と支谷が入り組んでおり付近は複雑な地形を呈している。三沢古墳群の形成されている丘陵はいわゆる小笠山礫層と呼ばれる地層で、本遺跡の西側の宇刈横穴墓群が造られている曽我・掛川層群とは全く違った様相を呈している。本遺跡の標高は52～55mである。

周辺で発掘調査を行った遺跡としては、宇刈川対岸の丘陵上に位置する一色前田遺跡（弥生時代）、春岡第1号墓（弥生～古墳時代）が所在し、その丘陵西側に川田古墳群（弥生～古墳時代）が位置する。丘陵部西側の低地には鶴田遺跡、鶴松遺跡、徳光遺跡、土橋遺跡等の、弥生時代から中世に至る集落址が確認されており、今後それらの遺跡との関係が大きな問題になってくるだろう。



第1図 三沢古墳群位置図・周辺遺跡分布図

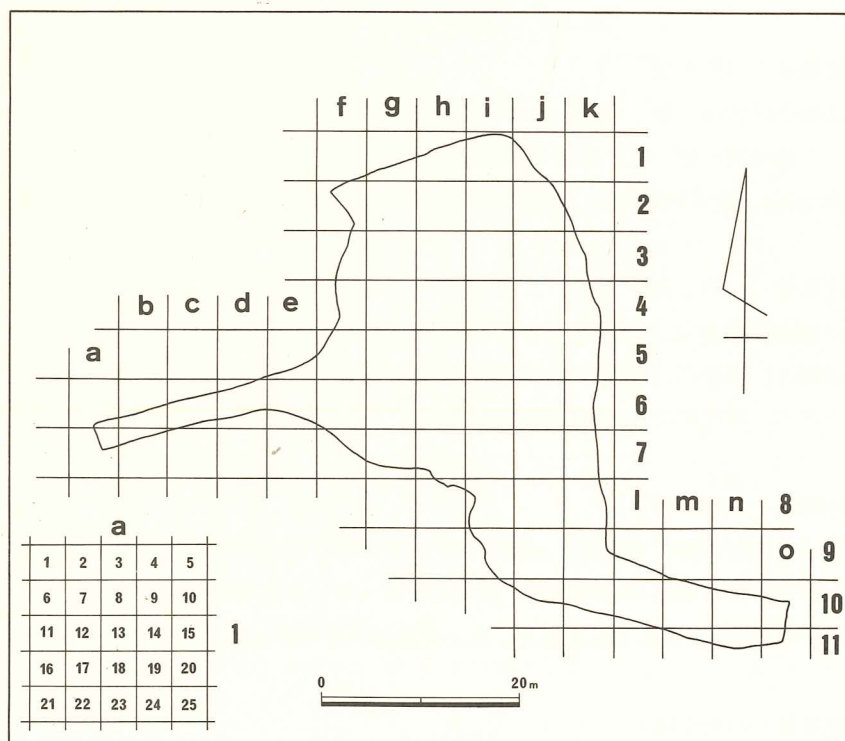
調査に至る経過

三沢古墳群（三沢2号墳）は、JR「袋井駅」より北約6kmに位置する。付近には県内でも有数の宇刈・春岡横穴墓群が古くから知られている。今回調査した三沢2号墳は昭和の初めのころ宇刈村役場により調査が行われ、大刀等が出土したとも伝えられており、比較的古くから知られていた。しかし、出土した遺物は惜しいことに現在すべて失われてしまっている。

昌栄造建より当地域の開発計画が提示されたのが平成2年11月で、当初は平成2年2月に地元住民より急傾斜地のため安全対策をして欲しいと申請が出されており、地元で昌栄造建に依頼し土石採集を行い、丘陵を崩し安全傾斜にすることとなり、そのために袋井市教育委員会は昌栄造建と協議し、結果、発掘調査に全面的な協力を約束していただいた。

調査方法は、調査地区全体をバックフォーにより客土の除去を行い、その後、1辺5mの方形グリッド（大グリッド）を設定した（大グリッドの内は25の小グリッド）。グリッド設定後ジョレン等により遺構の検出を行った。

現地図面は50分の1縮尺を基本とし、各々の遺構は10分の1または20分の1縮尺図を作成した。記録写真はブローニサイズ原画（白黒）と35mmサイズ原画（白黒・カラーリバーサル）を使用した。



第2図 グリッド設定図

Ⅱ 遺 構 と 遺 物

1 調査区概要

調査区は東側に突出した尾根上に位置し、対象となった総面積は約2,000m²であり、南北46.2m、東西69.5mの範囲に及ぶ。(第3図)

遺構は調査地区中央部に集中している。調査地区の平坦面は全て茶畑として利用されており南北に畝が走り攪乱が著しいものであった。また、三沢2号墳も宇刈村役場の調査によってかなり破壊されており遺構の残存度は低いものであった。

今回の調査で発見された遺構は竪穴住居址5棟、集石状遺構5基、溝状遺構2基、土坑22基、ピット19基、横穴式石室をもつ古墳1基を検出し調査した。

2 遺構

第1号住居址 (第4図)

本住居址は調査地区北側より確認されi-2-5、10グリッドを中心に位置する。主軸はN-60°-Eに採り、平面形は不整楕円形を呈する。カマド、柱穴は確認されなかった。南北約350cm、東西約420cm、壁高約26cmを測る。土師器の壺・台付甕・甕等の出土がある。

第2号住居址 (第4図)

本住居址は調査区北側、第1号住居址のやや南より確認されj-4-4、5グリッドを中心に位置する。主軸はN-87°-Eに採り、平面形は楕円形を呈する。カマド等は確認されなかった。南北約360cm、東西約470cm、壁高約25cmを測る。土師器の壺・甕等の出土がある。

第3号住居址 (第5図)

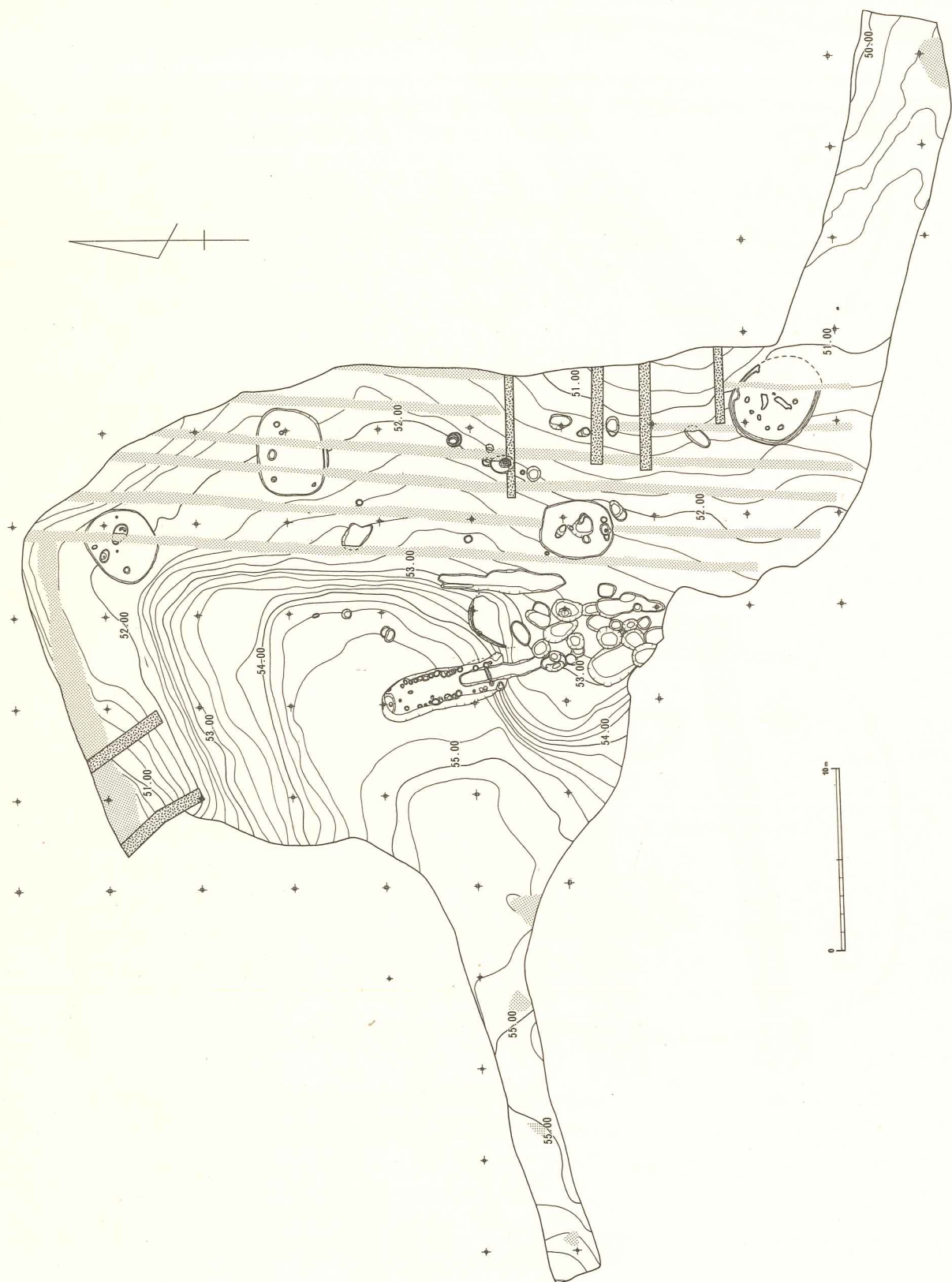
本住居址は調査区東側より確認されk-9-6、7グリッドを中心に位置する。主軸はN-57°-Wに採り、平面形は耕作等によって南東側が失われているが楕円形を呈すると思われる、焼失住居である。東西約420cm、壁高約25cmを測る。土師器の高坏・壺・甕等がある。

第4号住居址 (第5図)

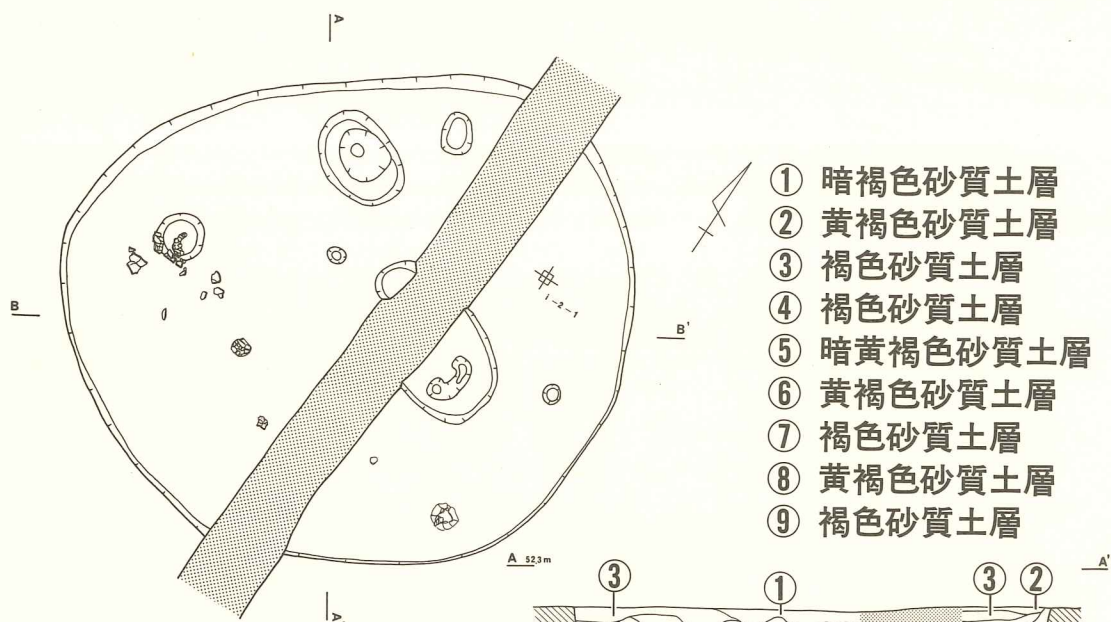
本住居址は調査区南側、中央より確認されi-7-5、10グリッドに位置する。主軸はN-5°-Eに採り、平面形は不整楕円形を呈する。カマド・柱穴等は確認できなかった。南北約400cm、東西約316cm、壁高約30cmを測る。出土遺物は少ないうえに細片のため器種は不明である。

第5号住居址 (第6図)

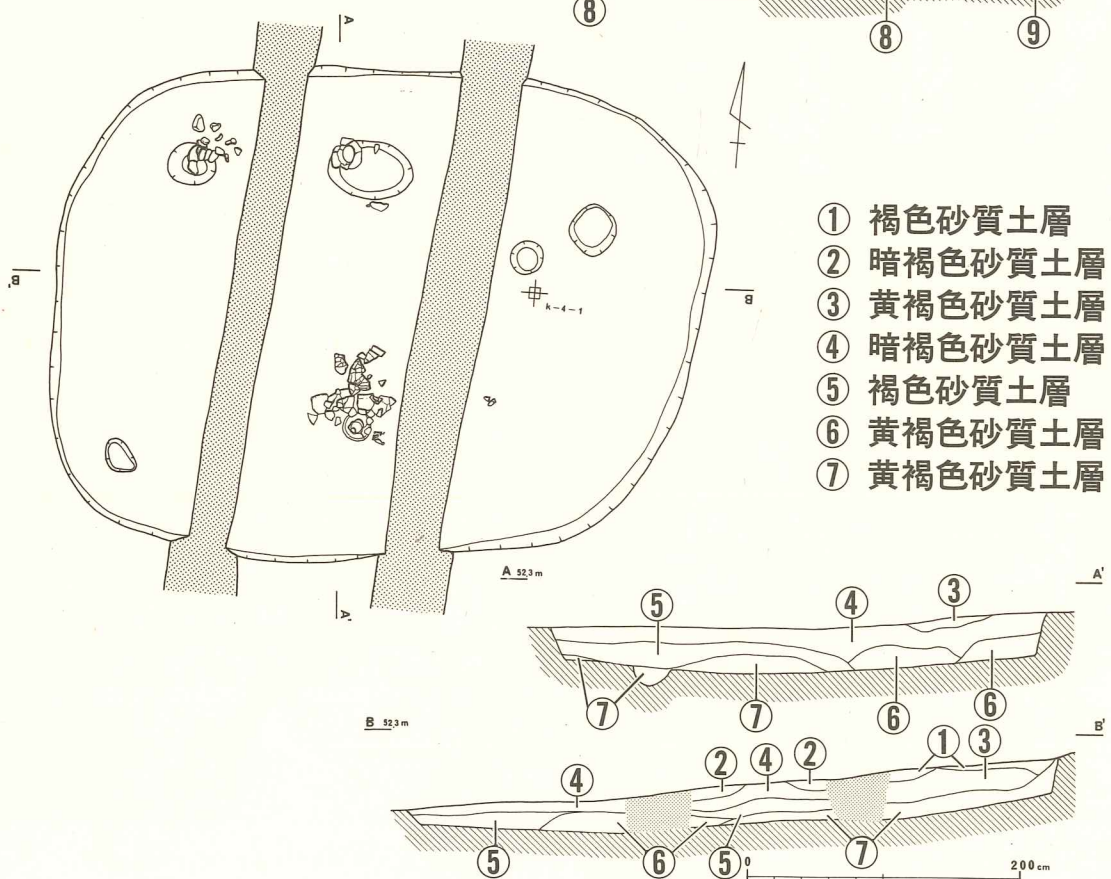
本住居址は調査区南側、中央より確認されi-6-14グリッドを中心に位置する。3分の2を三沢2号墳の造営により削られてしまっている。壁高約44cmを測り、壁はほぼ垂直で、壁溝



第3図 全体図



- ① 暗褐色砂質土層
- ② 黃褐色砂質土層
- ③ 褐色砂質土層
- ④ 褐色砂質土層
- ⑤ 暗黃褐色砂質土層
- ⑥ 黃褐色砂質土層
- ⑦ 褐色砂質土層
- ⑧ 黃褐色砂質土層
- ⑨ 褐色砂質土層



- ① 褐色砂質土層
- ② 暗褐色砂質土層
- ③ 黃褐色砂質土層
- ④ 暗褐色砂質土層
- ⑤ 褐色砂質土層
- ⑥ 黃褐色砂質土層
- ⑦ 黃褐色砂質土層

第4図 第1、2号住居址

が周囲を巡っていたものと思われる。土師器の甕等の出土がある。

第1号溝状遺構 (第6図)

本遺構は調査区南側、中央より確認され i-5-17、22、i-6-7、12、17、22、i-7-2 グリッドに位置する。主軸は N-4°-E で、長さ 684cm、幅 140cm、深さ 26cm を測る。須恵器の甕の破片の出土がある。

第2号溝状遺構 (第6図)

本遺構は調査区南側より確認され i-7-11、16、21 グリッドに位置する。2 基のピットと重複している。主軸は N-3°-E で、長さ 380cm、幅 110cm、深さ 14cm を測る。やや長軸が短いため溝状遺構の概念から外れてしまうかもしれないが、今回は溝状遺構として扱った。出土遺物は確認されなかった。

第1号土坑 (第7図)

本土坑は調査区中央やや東側に確認され、j-6-18 グリッドに位置する。規模は、径 80cm のほぼ円形を呈しており、確認面からの深さは 55cm を測る。壁はゆるやかに立ち上がる。覆土は黒色土を基本とし、4 層に分かれ、炭化物を大量に含む。出土遺物は土師器の台付甕が 1 点寝た状態で確認された。また、底部付近からは 15cm 前後の礫も確認された。

第2号土坑 (第7図)

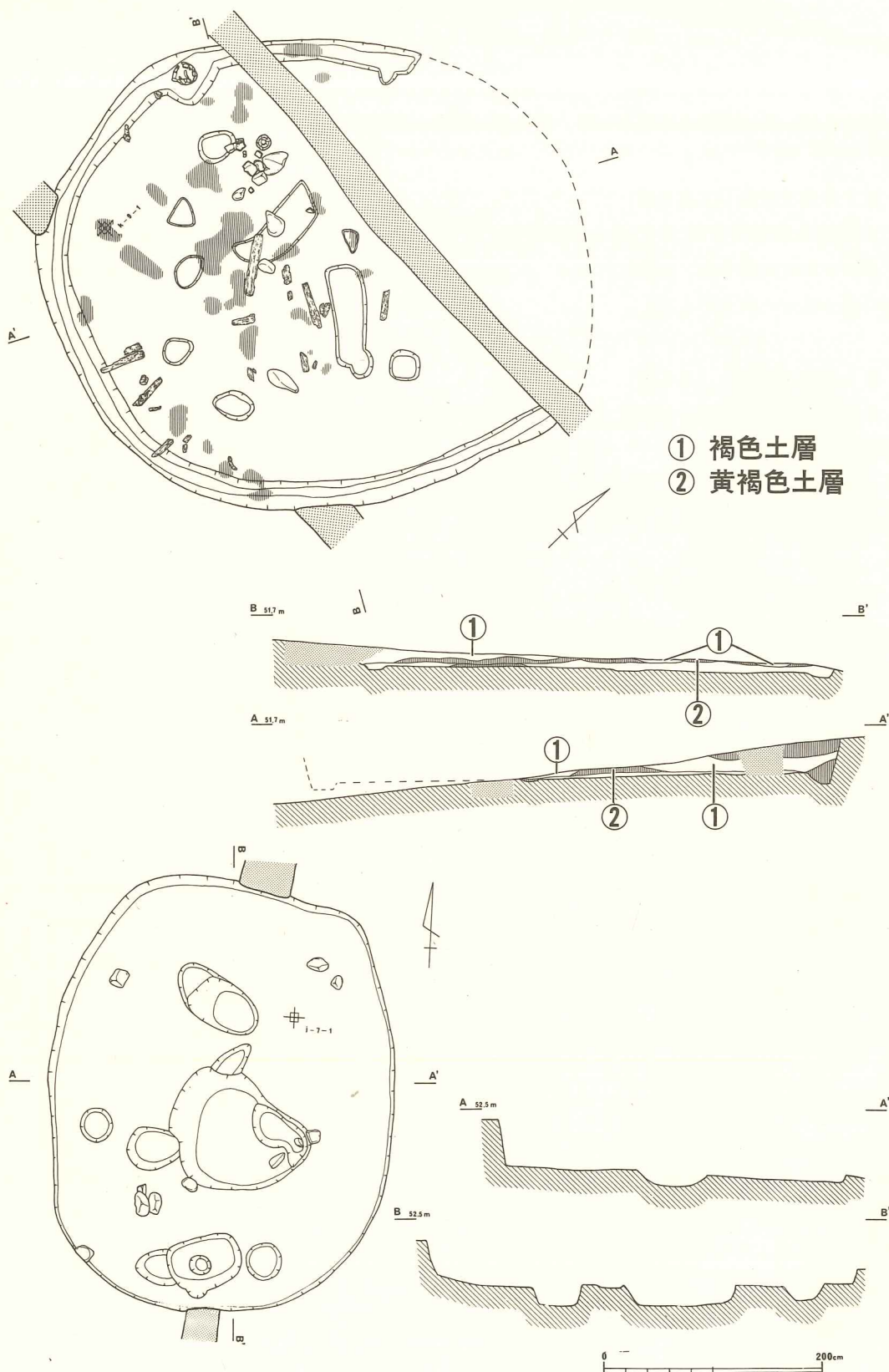
本土坑は調査区中央やや東側、第1号土坑の北側より確認された。j-6-7、8 グリッドに位置する。規模は、東側を攪乱に切られ、南側をトレンチによって切られ不明だが楕円形を呈していたものと思われる。確認面からの深さは 55cm を測り、壁はゆるやかに立ち上がるが中位で数段のテラス状のものを有する。覆土は 3 層に分かれ、基本的には第1号土坑と類似するが若干、炭化物の混入量が少なく全体的に暗々褐色を呈している。出土遺物は第1号土坑より小ぶりで台の部分の失っている土師器台付甕が、やはり寝た状態で確認された。

第3号土坑 (第7図)

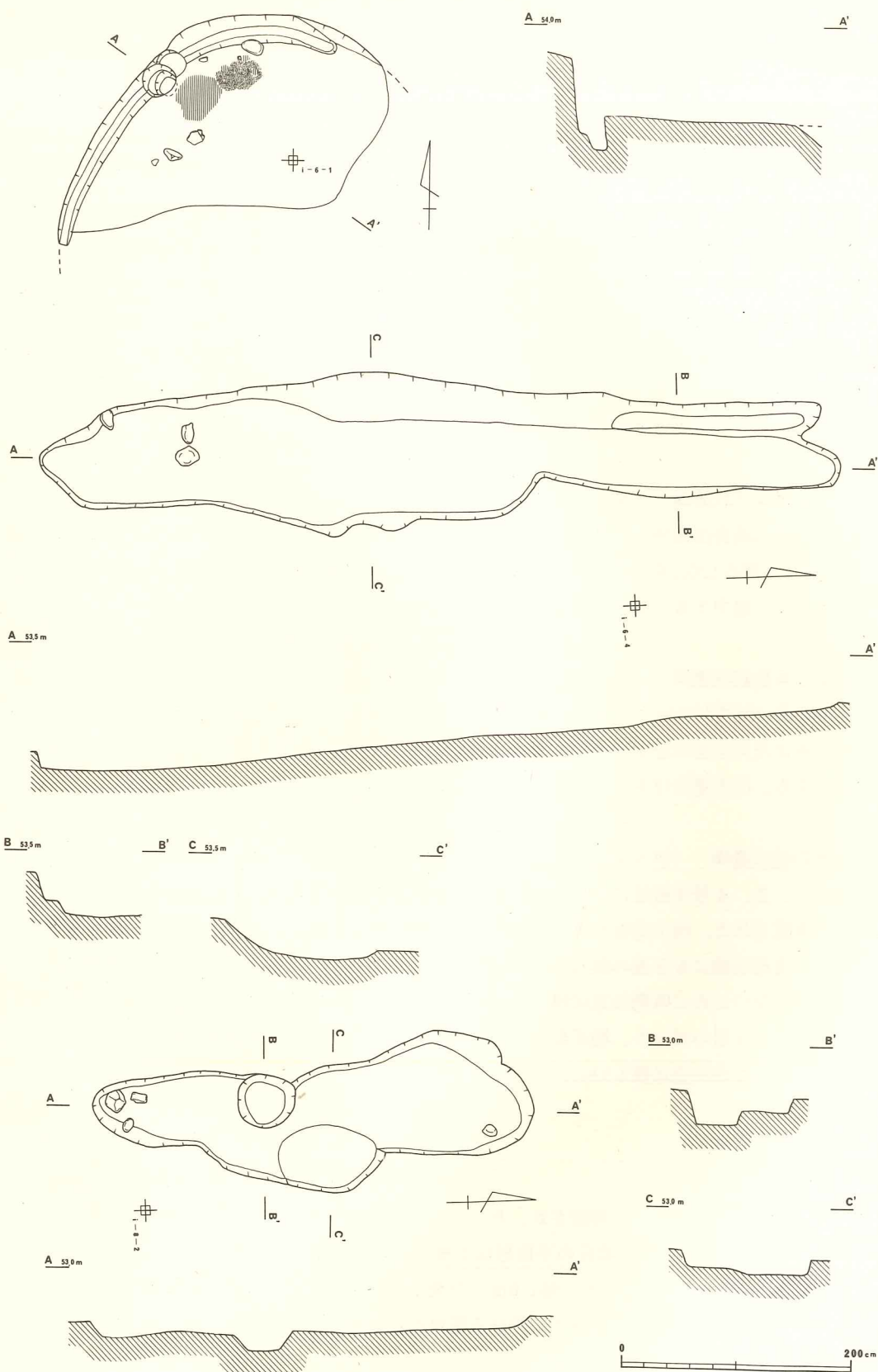
本土坑は調査区中央やや東側、第2号土坑の北側より確認された。j-5-25 グリッドを中心に位置する。確認面からの深さは 55cm を測り、壁はゆるやかに立ち上がるが中位で数段のテラス状のものを有する。覆土は暗々褐色を呈しており、底部付近に 5～8cm の小礫が確認された。

第1号集石状遺構 (第8図)

本遺構は調査区南側より確認された。h-7-7、8、12、13 グリッドを中心に位置する。規模は東西約 200cm を測り、南北は南側を他遺構と重複するため不明である。礫は南北約 120cm、東西約 120cm でほぼ方形の範囲に集中する。出土遺物は少なく時期決定は難しい。



第5图 第3、4号住居址



第6図 第5号住居址・第1、2溝状遺構

第2号集石状遺構 (第8図)

本遺構は調査区南側より確認された。h-7-4グリッドに位置し規模は他遺構と重複するため不明だが、ほぼ円形を呈する。礫は南北約100cm、東西約80cmの範囲に集中する。礫は遺存状態が悪いが第3号集石状遺構と同様の長方形を呈すると思われる。出土遺物は少ない。

第3号集石状遺構 (第8図)

本遺構は調査区南側より確認された。h-7-15グリッドを中心に位置する。規模は南北約60cm、東西約70cmを測り、礫は南北約90cm、東西約60cmでほぼ長方形の範囲に集中する。出土遺物は少なく時期決定は難しい。

第4号集石状遺構 (第8図)

本遺構は調査区南側より確認された。h-6-25グリッドを中心に位置する。規模は南北約160cm、東西約120cmを測り、隅丸長方形を呈する。礫は南北約120cm、東西約80cmでほぼ長方形の範囲に集中する。出土遺物は少なく時期決定は難しい。

第5号集石状遺構 (第8図)

本遺構は調査区南側より確認された。h-7-23グリッドを中心に位置する。南側が調査区外に及ぶため全容は把握出来なかった。礫は南北約120cm、東西約80cmでほぼ長方形の範囲に集中する。出土遺物は少なく時期決定は難しい。

その他の遺構 (第3図)

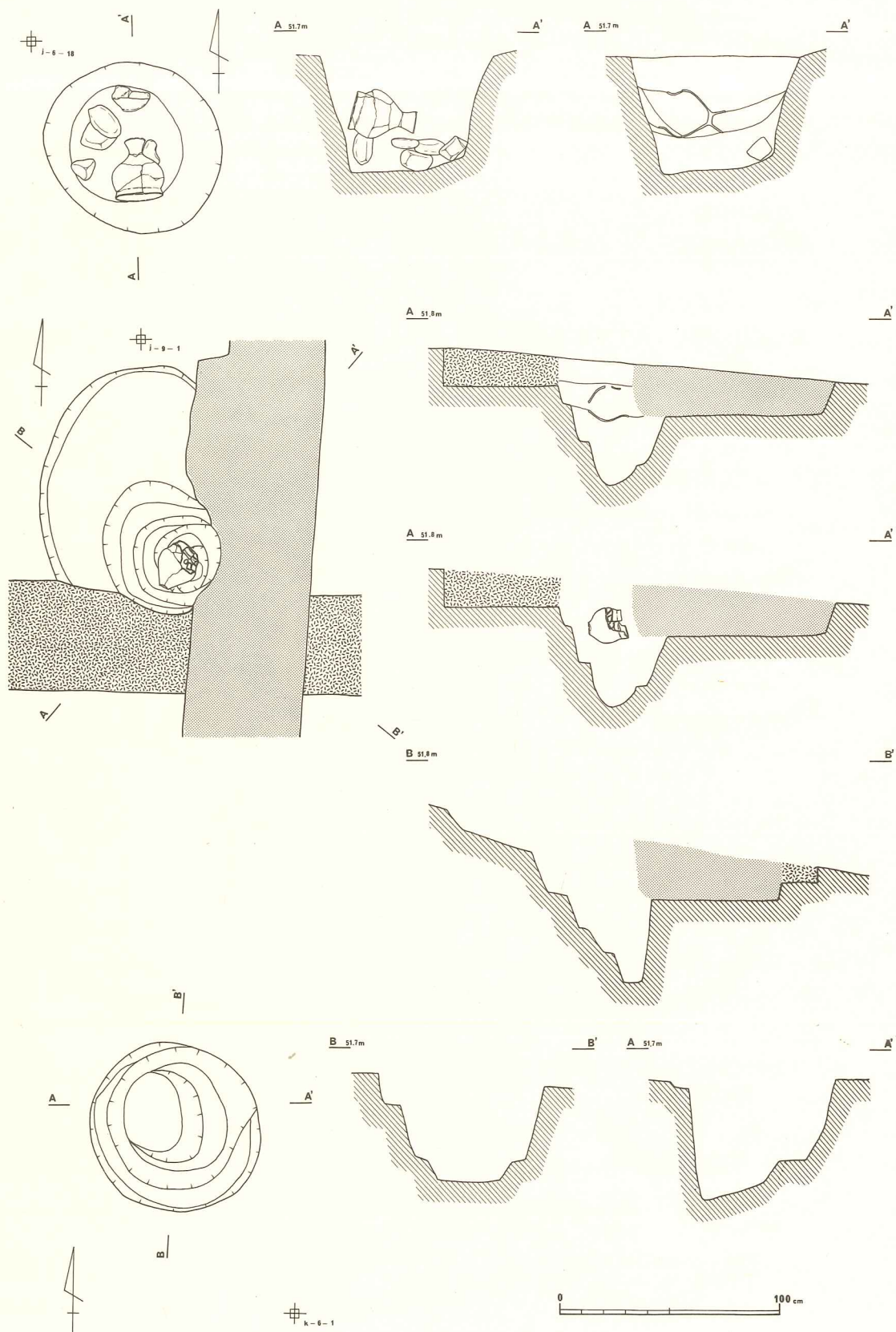
第2、3、4号住居址に囲まれた地区に第1、2、3号土坑以外に2基の土坑、5基のピットが確認された。出土遺物が無いため、時期決定は難しいが住居址群とほぼ同時期と思われる。また、墳丘南側にも5基の集石状遺構の付近に5基の土坑、11基のピットが確認された。出土遺物が少ないために時期決定は難しいがほぼ三沢2号墳と同時期と思われる。

墳丘上に3基のピット、墳丘東側に1基の土坑、2基のピットが確認されたがいずれも出土遺物が無く時期決定は難しい。

三沢2号墳

墳丘 (第9図)

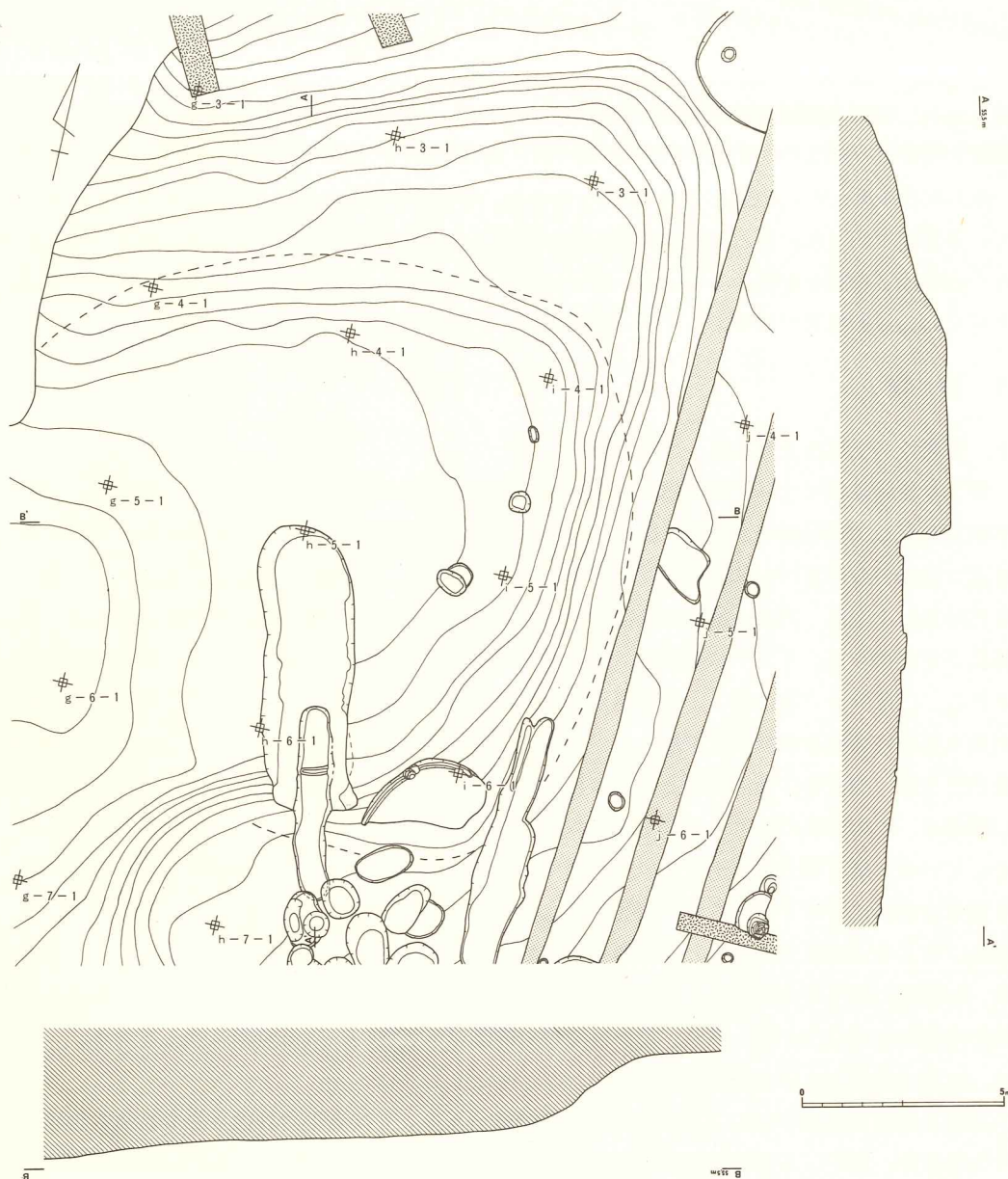
本古墳は調査区中央より確認され、h-5、g-5大グリッドに位置し、南北約14m、東西約15m、高さ約2.2mで、墳丘の平面形は不整楕円形を呈すると思われるが、北東に造り出しを思わせる台形状(長さ1.2m、幅1.6m)の突出部がある。また、墳丘は尾根を削って造られており、西側部分については西より伸びる尾根から分離されておらず、その部分に墳丘を区画するような遺構等は確認されなかった。



第7图 第1、2、3号土坑



第8図 第1、2、3、4、5号集石状遺構



第9図 三沢2号墳

墳丘は前述のように尾根の自然の高まりを利用し、丘陵斜面を削り出し、周囲に平坦面を造り墳丘を区画し突出部を造り付けていた。墳丘周囲には周溝等は確認されず、古墳造営当初から造られなかったものと思われる。墳頂部は耕作等により3分の1程が失われてしまっている。素掘羨道は主軸を石室と同じくし、やや弧を描くように東へ延びてゆくが南側を土坑と重複している。幅約80cmを測る。

主体部 (第10図)

南へ向けて開口する横穴式石室である。主軸は $N-17^{\circ}-W$ に採る。石室は黄褐色砂礫層を

掘り込み、下層の砂層まで掘り窪めて構築されている。全体的に大規模な乱掘を受けており、側壁、奥壁の石材はそのほとんどが抜き取られ、遺存していた場所は一部しかない。他には床の一部と根石を据えていた浅い穴だけが残っている。遺存する側壁は多いところで石組が3段残っている程度であった。根石は円礫の横口積を原則とするが小口積のものもある。側壁に使用された石材は2種類を原則としている。床には敷石等は確認されなかった。掘り方については長方形ないしは船尾形ではなかったかと思われる。全長約9.2m、玄室部長約7m、同幅約2.2m。

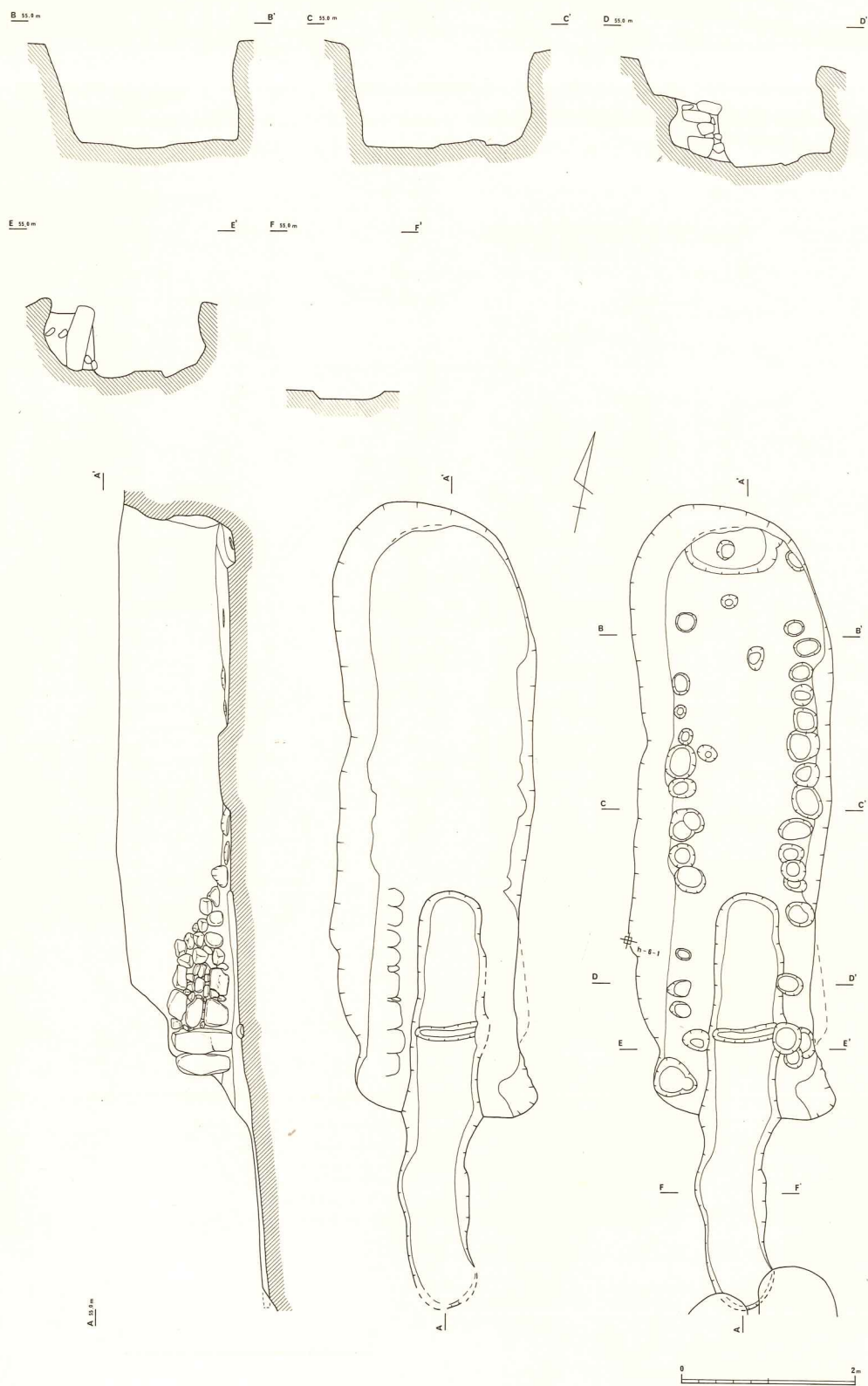
3 遺物

1. 住居址・土坑出土の土器 (第12図)

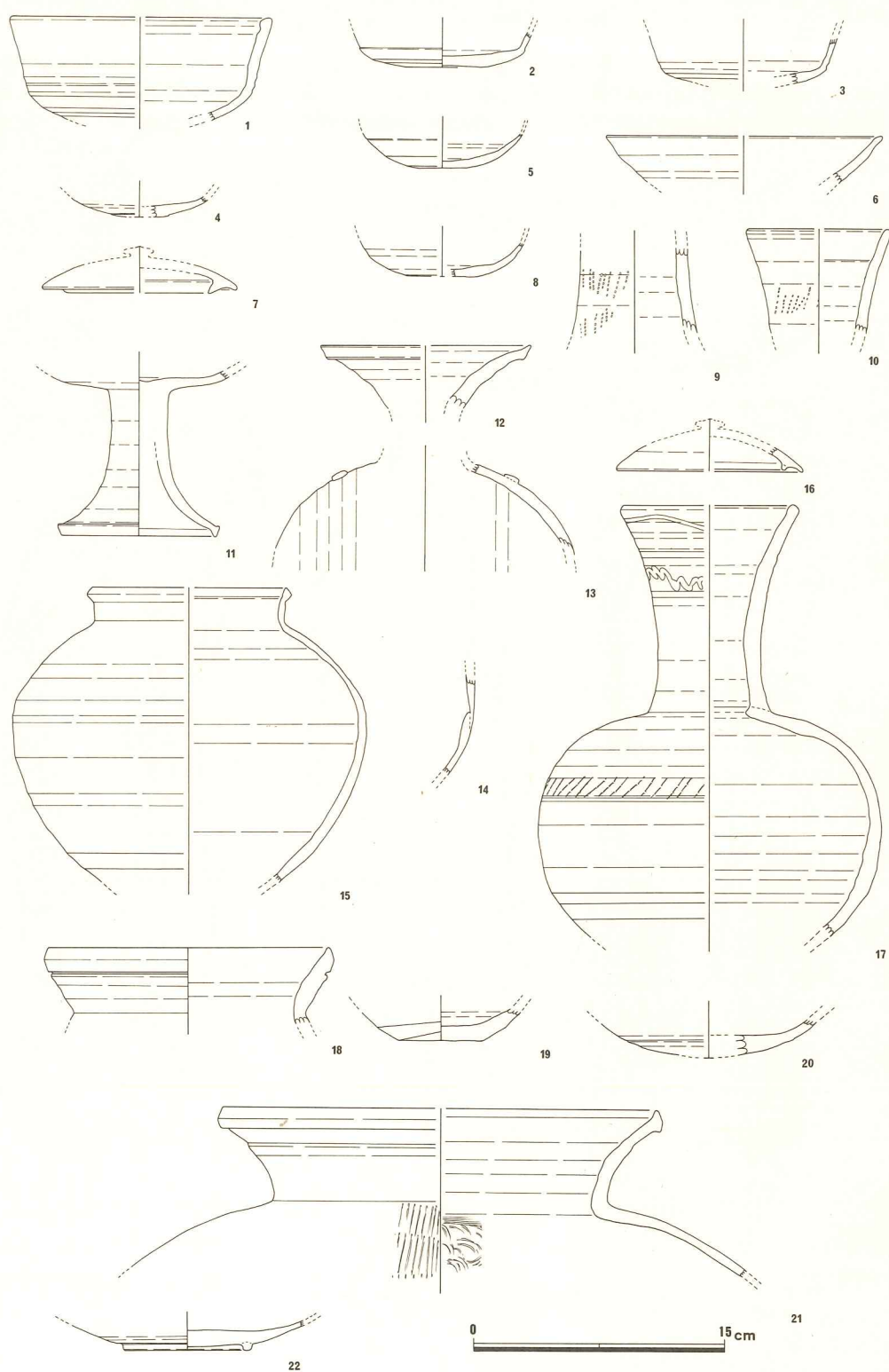
第1号住居址出土土器 23は口縁部及び台部を欠損する小型台付甕である。口縁部は、くの字状に外反し体部は緩やかな弧を描き、体部下半に接合の過程でできる屈曲部が若干残る。24は壺で肩部のみの遺存で体部はほぼ球形を呈すると思われ、2段の櫛刺突文が施される。第2号住居址出土土器 25は小型壺の底部で底径4cmを測る。26は口径23.6cmを測る大型壺で、肩部以下を欠損する。ラッパ状に開き、折り返す口縁部は櫛刺突文が巡る。肩部にも刺突文が施される。27はラッパ状に開き、折り返す口縁部はX字状刺突文が巡り、口唇部外側には指頭痕が残り肩部には櫛刺突羽状文が施され、口径21.2cm、高さ41cm、底径8cmを測る。第5号住居址出土土器 28は台付甕の胴部と台部の接合部。29は小型台付甕で体部下半と台部を欠損する。口縁部は、くの字状に外反し端部を摘まみ出したのちキザミが施され、S字状口縁に近い形態をしている。第1号土坑出土土器 30は台付甕で口縁部は、やや、くの字状に外反し体部は弧を描き口唇部にキザミが施され、口径18.9cm、胴部最大径23.8cm、高さ26.3cm、底径10.3cmを測る。第2号土坑出土土器 31は小型台付甕で台部を欠損し、口縁部は30より垂直に立ち上がり、口唇部にキザミが施され、口径16cmを測る。32は第1号住居址付近の攪乱坑より出土した高坏で櫛刺突羽状文が施される。23から32の土師器は弥生土器様式を色濃く残している。

2. 三沢2号墳出土の土器 (第11図)

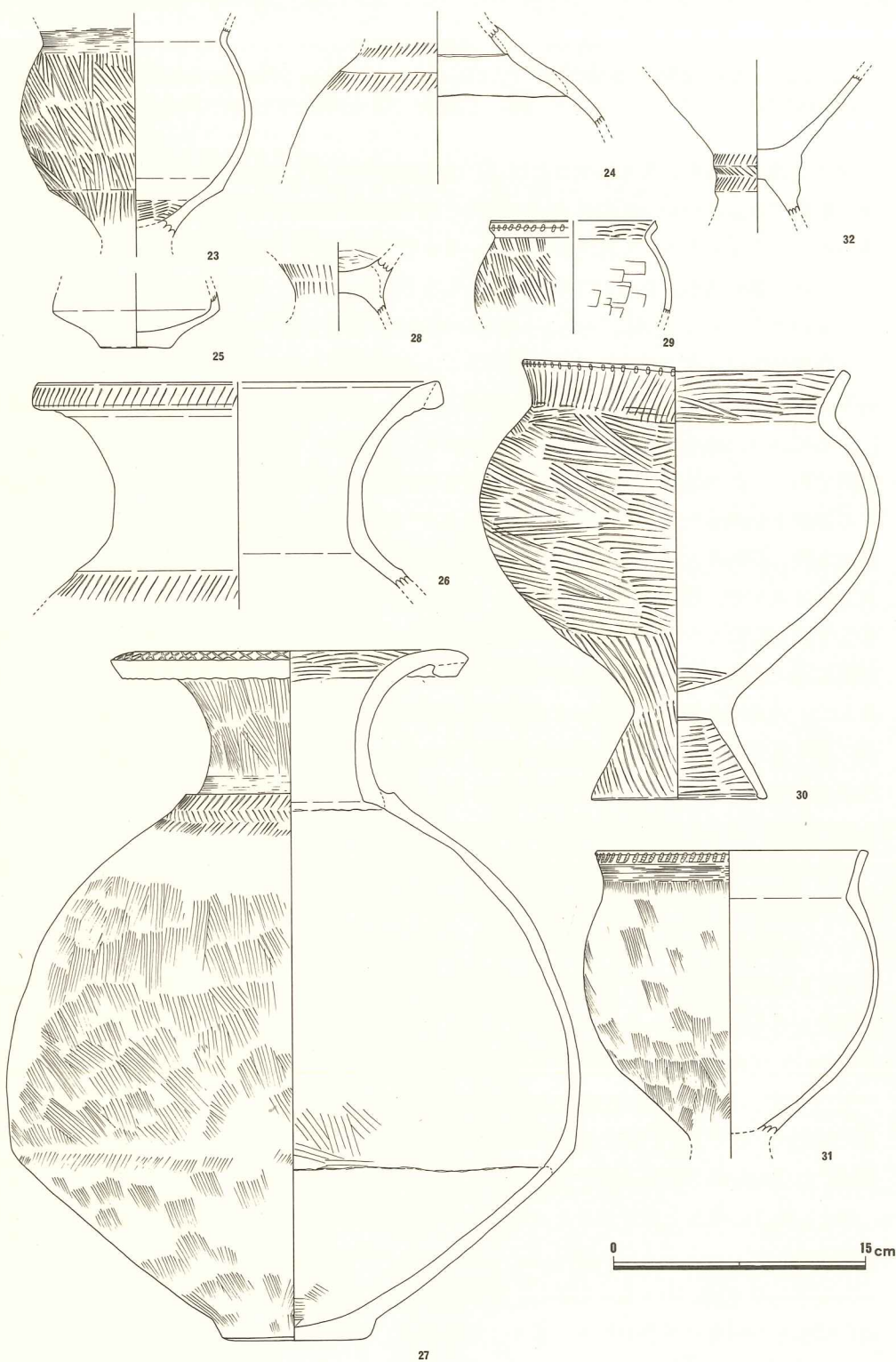
三沢2号墳主体部 1.2.は埴で体部に一条沈線が巡る。9は高坏の脚部と思われる。14はフラスコ瓶で、第1、2号集石状遺構出土の12、13と同一個体と思われる。15は短頸壺で同法量のものももう1点出土している。17は脚付きの長頸壺と思われる。口径は10cmを測る。19は壺の底部と思われる。21は大型甕で肩部以下を欠損している。主体部からもう1点、第3号集石状遺構から1点、合計3点の大形甕の出土がある。第1号集石状遺構から7の蓋及び、口縁部に1状の沈線の巡る短頸壺18の出土もある。第2号集石状遺構からは壺の底部と思われる20が出土しており、第4号集石状遺構からは1.2.と同法量3が、第5号集石状遺構からは瓶の口縁部10が出土している。4.5.8.の坏身、11の高坏、16の蓋、22の高台付皿は攪乱坑から出土している。22以外は7世紀前半TK217並行期のものと思われるが、22は平安時代に属するものと思われるが遺構等は検出されておらず検討が必要である。また、集石状遺構、攪乱坑から須恵器が多数出土しているが調査区内には須恵器を出土する遺構は他には考えにくいため出土した須恵器は三沢2号墳のものとするのがより自然である。



第10図 三沢2号墳 主体部



第11図 出土遺物（1）



第12図 出土遺物（2）

Ⅲ ま と め

今回の調査区の中にある三沢2号墳は、当初静岡県西部でも有数の宇刈横穴墓群のまっただ中に位置することから、比較的古式のもので調査以前の地形を見るかぎりでは墳頂部はすでに失われてしまっており、主体部が残っていないのではないかと思われたが、しかし、調査が進むにつれて横穴式石室をもつ後期古墳であることが分かった（周辺の古墳と合わせて群集墳をなすものと思われる）。出土遺物より見た時期は7世紀前半代と考えられる。

後期群集墳は近年、全国的に調査例が多く、袋井市内においても山田原古墳群、地藏ヶ谷古墳群、団子塚古墳群、金山古墳群、山本山古墳群、長者平古墳群等と少なからずその存在が確認されており、そのなかで横穴墓群と同一丘陵に造営されているのは地藏ヶ谷古墳群と三沢古墳群である。この地藏ヶ谷古墳群を墓域とした集団は6世紀後半代を境とし古墳から横穴墓へその墓制を転換させてしまったと考えられるが（地藏ヶ谷古墳及び横穴 1965）、しかし、三沢古墳群と宇刈横穴墓群の関係は宇刈横穴墓造営の盛期である7世紀前半代に並行して造営されているようで、周辺には奥谷田、馬ヶ谷古墳群がやはり同時期に横穴式石室を有する古墳群として成立したようである。太田川流域の他の地域についても小規模ながら後期群集墳が横穴墓群と同一丘陵上に造営されている例もあるが、その造営時期はほぼ横穴墓群より遡るものばかりで、太田川流域においては6世紀中・後半期に各地で横穴墓が造営され始め、7世紀前半代に至り横穴墓は周辺域の主体的な墓制となったものと考えられていたが、三沢2号墳の調査結果から伝統的な墓制をもつ集団が存在していたことの証明になるものと思われる。しかし、三沢古墳群の全容が判明したわけではないため今後の当地域における調査が待たれる。

墳丘東側の平坦部に分布する竪穴住居址群は一色前田遺跡（弥生後期）の集落に続く古墳時代初頭の集落址である。この集落は住居址5棟と住居に囲まれた広場から構成されている。しかし、この集落は一色前田遺跡のように集落をめぐる溝状の遺構等は無く、集落としての性格を異にしているようだが、倉庫をもっておらず、水田の広がっていた沖積地からは、かなりの標高差があり、一概に一般集落とは考えにくい点もある。また、この竪穴住居群は弥生時代から古墳時代への過渡期の世帯共同体の在り方を表しているのではないかと考えられる。

墳丘南側に分布する集石状遺構は規格性が認められ中世集石墓と考えられるが、出土遺物が少なく時期決定ができず、今回は集石状遺構として取り扱ったが、中世の所産と考えるならば宇刈地域には宇刈七騎と称する武士団が興っており、彼らとの係わりについて検討が必要であろう。

以上、調査の概要と若干のまとめを述べてきたが今回の調査によって明らかになったことは袋井市の歴史を考える上で大変に大きなものであろうかと思われる。比較的狭い調査区ではあったが多くの発見があった。しかし、数多くの問題点も出てきており今後研究を進め解明しなければならないものと思われる。また、猛暑の中、日陰の無い調査区で作業に従事して下さった作業員の方々、多大な協力をして下さった地元宇刈自治会や調査区周辺の住民の方々にお礼を申し上げますとともに、現地調査及び報告書刊行まで調査員の手順が悪く多大なご迷惑をかけてしまったことを深くお詫びしたい。

写 真 图 版



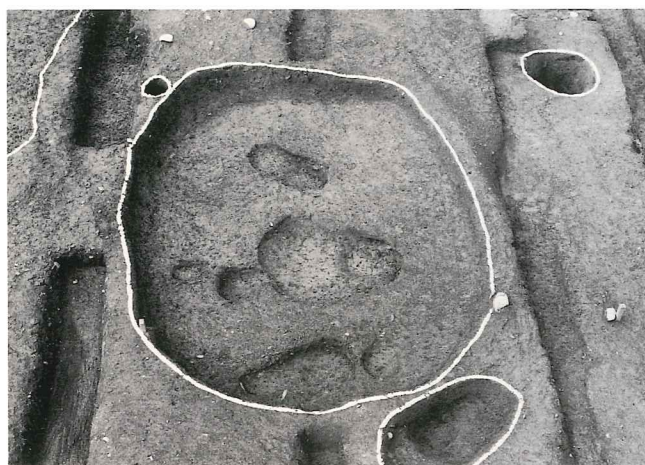
第1号住居址 (SWより)



第2号住居址 (Wより)



第3号住居址 (Eより)



第4号住居址 (Eより)



第5号住居址 (Sより)



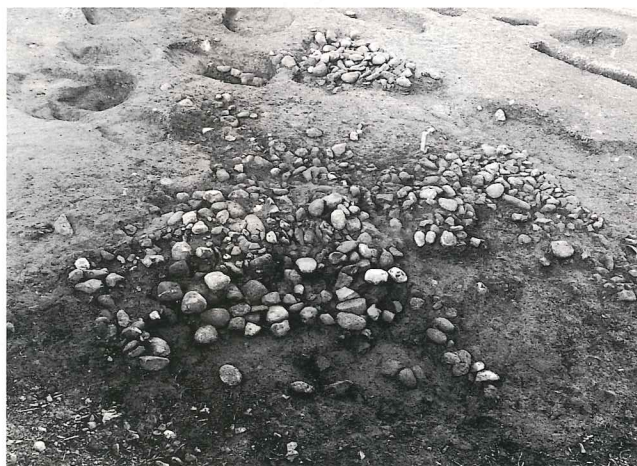
第1号土坑遺物出土状態 (Eより)



第2号土坑遺物出土状態 (Eより)



土坑群全景 (Sより)



第1、2、3号集石状遺構出土状態 (SWより)



第4号集石状遺構礫出土状態 (Eより)



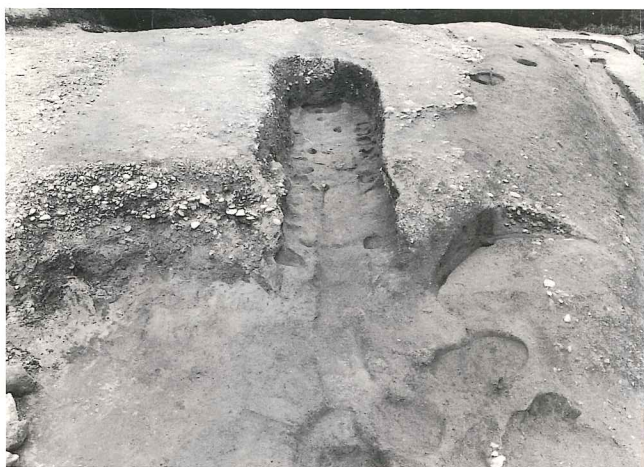
第1、2、3、4、5号集石状遺構完掘状態 (SWより)



三沢2号墳主体部 (SWより)



三沢2号墳主体部石室残存状態 (Eより)



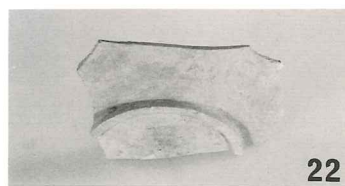
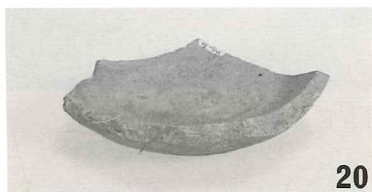
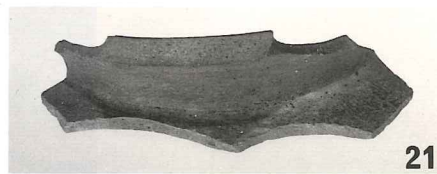
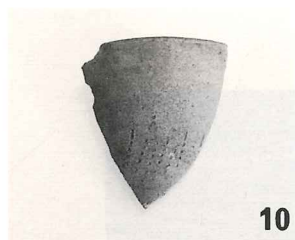
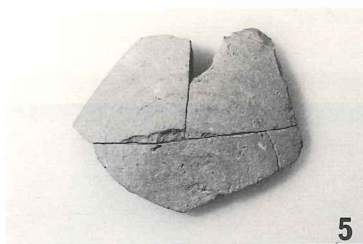
三沢2号墳主体部完掘状態 (Sより)

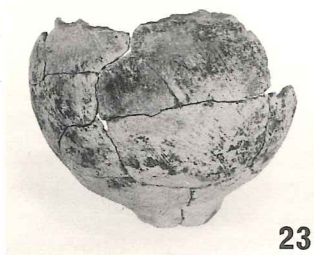


調査区南側全景 (Eより)



調査区北側全景 (S Eより)





23



24



25



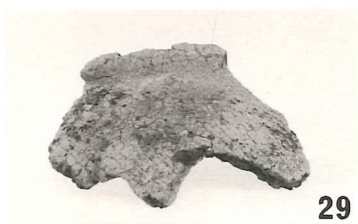
26



27



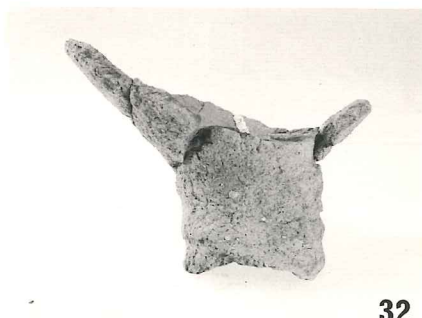
30



29



31



32

袋井市三沢古墳群

〈昌栄造建土石採集事業に伴う
三沢2号墳緊急調査報告書〉

1991年3月31日

発行 静岡県袋井市教育委員会
〒437 袋井市新屋1-1-1

印刷 (有)デザインオフィス エム・エス・シー
〒437 袋井市久能1977-7